

科学学士院図書館蔵

一五六五年四月二十七日ルイス・フロイス書翰写本

神 田 千 里

は じ め に

本稿では、一五六五年一月三十一日、京都で布教活動を続けていたガス
パル・ヴィレラのもとに到着したイエズス会宣教師ルイス・フロイスが、
到着後ゴアに書き送った三番目の書翰とされる報告書の写本を翻刻、翻訳
する。使用する底本はリスボン市科学学士院図書館 (Biblioteca da
Academia das Ciências) に所蔵される、*Cartas do Japão* に収録されたも
のである (vol.3 ff.180-184v.)。同じ書翰の写本がローマのイエズス会文
書館に *Jap.Sin.* 文書にもあり (*Jap.Sin.*5 ff.225-230v.)、一部の語句を除
いてほぼ同じ内容である。

本書翰は、我が国でよく知られている、一五九八年にエヴォラで刊行さ
れた『日本通信』 (*Cartas Qve os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus
escreuerão dos Reynos de Iapão e China aos da mesma Companhia da India
e Europa, dès do anno de 1549 até o de 1580*, 以下 CEV と略称) に収録
されている (ff.181v.-184v.)。また一五七〇年七月コインブラで刊行され
た『日本通信』 (*Cartas Qve Os Padres e Irmãos da Companhia de Iesus,
que andão nos Reynos de Iapão escreuerão aos da mesma Companhia da
India, e Europa, dès do anno de 1549 até o de 66*, 以下コインブラ版『日
本通信』七月版ないし CCOJ と略称, 東洋文庫所蔵⁽¹⁾) にも収録され、さ
らに一月後の一五七〇年八月にやはりコインブラで刊行された『日本通信』
(原題同上, 以下コインブラ版『日本通信』八月版ないし CCOA と略称,

(1) 当該書翰の収録箇所は ff.522-532。

上智大学キリシタン文庫所蔵⁽²⁾にも収録されている。

これらの刊本収録の書翰を、上記二種類の写本と対比してみると、編集の際に削除されたり、改変された部分が少なくない。その中には、その内容が宣教師たちの内部事情に関するものであるために一般読者の関心を考慮して省略したとおぼしい部分もあるが(例えば f.180, ff.184-184v. など)、そのみならず、禪宗の教義に関する部分 (f.182) や阿弥陀の救済を述べる部分 (f.183v.), 仏教信者の習俗の報告 (f.183), 僧侶の男色 (f.182v.) 等々もある。何故これらの記事を削除・改変したのかについてはさらに考証を必要とするであろうが⁽³⁾、これらの部分にも、当該期日本の社会史の史料として興味深い記述が含まれていると思われるので、本写本を翻刻、翻訳する次第である。

刊本に収録された本書翰の邦訳は村上直次郎氏訳『耶蘇会士日本通信』上巻(一九二八年, 雄松堂書店)所収のものと、松田毅一氏監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第2巻(東光博英氏訳, 同朋舎, 一

(2) CCOA は、ラウレスキリシタン文庫データベースと題するホーム・ページ上で公開されている。当該書翰の URL は、[http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/html/index.html/pageview/id=JL-1570-KB4/page=0474v. ~ page=0484r.](http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/html/index.html/pageview/id=JL-1570-KB4/page=0474v.~page=0484r.)、二〇一〇年一〇月一九日閲覧。

(3) 例えば「生きることと死ぬことしかなく、この世の生の後には何もない」(f.182) との禪宗の教義に関する記述の削除については、一五六五年一月二十日書翰にも、同年三月六日書翰にも、同様の削除・改変が見られる(詳細は拙稿「科学学士院図書館蔵一五六五年一月二十日ルイス・フロイス書翰写本」『東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト 日本における地域と社会集団—公共性の構造と変容—』〈二〇〇八年度研究成果報告書〉, 二〇〇九年, 同「科学学士院図書館蔵三月六日ルイス・フロイス書翰写本」『東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト 日本における地域と社会集団—公共性の構造と変容—』〈二〇〇九年度研究成果報告書〉, 二〇一〇年を参照されたい。但し CEV 全体に関しては必ずしも一貫して削除・改変されているわけではない。ルターの教説を彷彿とさせる、阿弥陀信仰に関する記述 (f.183v.) が削除されている点を考慮すると、禪宗の記述の削除に関しても、キリスト教世界における異教的信仰との関連を想定する余地もあるかに思われる。例えばヘンリー・カメンによれば、一五二四年にアンダルシア地方の村民は「我々は生まれ、死んでいくだけでそれ以上何もない」と主張したという (Kamen, H. "Early Modern European Society", 2000 by Routledge, London, p.211)。なお踊共二『改宗と亡命の社会史—近世スイスにおける国家・共同体・個人—』創文社, 二〇〇三年, 三三頁参照のこと。

九九八年)とがあり、訳文作成にあたり参照させていただいた。翻刻に際し、*Cartas do Japão* 収録の写本以外に、*Jap.Sin.* 文書収録の写本を適宜参照した。

最後になったが、本書翰写本の翻刻・翻訳による掲載を筆者に許可された科学学士院図書館に感謝の意を表する次第である。また *Cartas do Japão* 閲覧に際しては東京大学史料編纂所海外史料室から、*Jap.Sin.* 及びコインブラ版『日本通信』八月版の閲覧に際しては上智大学キリシタン文庫から、またコインブラ版『日本通信』七月版の閲覧に際しては東洋文庫から、それぞれご厚意を得たことに感謝の意を表したい。

I 訳文

◎ 凡例

- (1) エヴォラ版『日本通信』収録の写本になく、*Cartas do Japão* 収録の写本にある部分は、〔 〕により提示した。
- (2) 意味内容に関わると思われる、*Cartas do Japão* 収録の写本と、*Jap.Sin.* 収録の写本、コインブラ版『日本通信』及びエヴォラ版『日本通信』との異同は、一部について脚注により提示した。

◎ 本文

[180] パードレ・ルイス・フロイスが、一五六五年四月二十七日に、都からゴアのコレジオに宛てて書いた三番目の手紙の写し

〔我等の主イエス・キリストの恩寵と永遠の愛とが常に我等の魂にいますことを、アーメン。非常に長い二つの手紙を、ここから豊後国へ出発した第一の使者に託して、この都から以前に(尊師等に)書き送った。そしてその後、(尊師等が)知ったならば喜ぶであろうことが続いて起こったが、ガスパル・ヴィレラ師(o padre Gaspar Vilella)は他の重要な仕事があるために、その代りに私に(手紙を)書くように言ったので、〕四句節に行われた我等が主への奉仕から始めて、それらについて私が思い出すこと

を述べよう。〔四旬節の数日前、ガスパル・ヴィレラ師は、この地の習慣に従い、ここから幾人かの領主を訪問し、飯盛の城、奈良そして沢 (Saua) に居るキリシタン達から告解を聞くために出かけた。そして訓練を受けた幾人かに洗礼を授け、その地から引き続き二〇ないし三〇レグワ先へ行くことに決めた。というのは、諸国 (diuersos reynos) から健康を回復するために多くの人々が集まる温泉のような場所で [180v.], (人々が) デウスのことを聞きたがっているとの情報を得たからである。既に翌日出発する準備が出来たところでルイス修道士 (irmão Luis) と私がこの都で重い病気になるとの伝言が届き、それにより出発を別の機会に延期することを余儀なくされた。直ちにこの地で四旬節のはじめに (ヴィレラ師と我等は) 出会い、主は、その慈悲と迅速さによって、まもなく我等が回復することを嘉したまうた。〕四旬節の仕事は、司祭 (o padre) が毎週日曜日に福音を説くことだった。毎週水曜日にはダミアンという名の日本人修道士が、キリシタンたちに告白に必要な部分を詳しく明らかにして、悔悛の秘蹟について説いた。毎週水曜日の夜には連禱の後常に修院の者全員と外部の者数人による鞭打ちの苦行があった。毎週金曜日にはミサの後に、一人の若者が受難について説き、夜に多くのキリシタンらの集会で、司祭が再び、彼等を信仰へと誘う幾つかの事柄と共に先の説教を要約し、そして終わりにミゼレレ・メイ・デウスの聖歌を唱えて全員が非常な信仰と熱意をもって鞭打ちの苦行を行った。枝の主日には修院の狭い敷地に合せて行列をその日に必要な他の事と共に行った。やがて聖木曜日と復活祭のために多数の人々が一〇、二〇及び三〇レグワのところから訪れ始め、その中に幾人かの身分の高い貴人 (fidalgos) が妻子と共にやって来た。彼等は馬や輿に乗ってやってきたとはいえ、これらの日々に降った大量の雨の中で功德となる材料はなくならなかった。司祭は、約二五〇名のキリシタンの告解を聴き、聖週の木曜日には彼等に洗足式について説教し、聖体の秘蹟を授ける前に再び多大な愛を込めて他の説教を行い、約七〇人が、我々が間違いなく大いに狼狽するほど⁽⁴⁾の多大なる涙と啜り泣きと共に聖体を

(4) この部分 CEV では、"por certo nos causauão grandissima consolação" (我々に大いなる慰めをもたらすほど) となっている。

拝領した。ルイス修道士が礼拝堂の中に非常に豪華な墓を造っていて、そこに聖体を納めたが、非常に豪華で美しい武器を持ち、主を取り出すまで警固する人々を配置しておくにも事欠くことはなかった。午後になると、キリシタンたちは生来悔悛を好むので、この時彼等の中で黒の祭服、荊冠、棘のついた鞭をやりくりし、聖体の前に三度やって来て大いに涙と血とを流した。夜に、彼等が初めて見る⁽⁵⁾ 暗黒の祭式が終わった後、蠟燭が消えた中で一人の日本人の子供が一時間半ないし二時間にわたって四人の福音書著者総てから集めた受難の文章を説いた。その後司祭が受難のより重要なエピソードについて、悔悛と我等が主なるキリストの受難についての感動とを促しつつ説教を行い、彼等が感動した後、非常な熱情、涙と信仰を伴った鞭打ちの苦行が行われたが、疑いもなくこれらは主を讃美すべき材料を我等に与えることだった、というのは、この最後に発見された地では極めて新奇なことであり、悪魔がかくも尊崇されている偶像崇拜のかくも盛んな地で聖なる受難の祝祭が行われ、人々が集まったからである。そして金曜日の主の（墓からの）取り出しは、その日に（然るべく）なされている通りに行われ、土曜日にはキリシタンたちの喜びと慰めとともに勤行が行われ、水と復活祭の蠟燭が祝福され、予言と連禱がなされた後、司祭が、錦の式服〔（それはここでは理に適っており、キリシタンが見ると喜ぶものであるが）〕⁽⁶⁾を着てミサを始めた。夜半過ぎには、[181]この修院は非常に身分の高い貴人のキリシタンと女性らで溢れており、皆非常に豪華な服を着てミサと復活の行列を待っていた。夜明け前に司祭が二時間ミサを歌い、その後聖体とともに行列が行われ、全員に大いなる慰めをもたらした。幾人かのキリシタンが聖体を拝領した。二度目のミサの終わりに一人の修道士が復活の秘儀を説いた。

都のキリシタンたちは、司祭が指示したことにより、慈悲と愛のうちにより団結するために、降誕祭と復活祭の頃、外部からやって来るキリシタン総てにここで会食させることを習慣としており、招待されることになっ

(5) この部分 Jap.Sin. では "que elles uierão" (彼らが初めて来る) となっている。

(6) この部分 CEV では、"borcado que cá há" (当地にある錦の祭服) となっている。

ている同じ貴人たちがこの場で費やされるものの大部分を彼等の家から都に運ばせた。ここに重立った者たち全員が集まり、修院の中で食事をし、デウスのことを遅くまで語り、主を讃えて幾つか（の歌）を歌った。そして異教徒たちが外部から彼等（キリシタン等）の噂を聞いたため、教会と祭壇の装飾に関する知識をも持ち、中に入れるよう強く懇願し、彼等にこれを拒むことはできなかった。中に入った女性たちの多くは祭壇の前で跪き、手を高く挙げ、我等の主なるキリストの像を讃美した。その夜及び翌日、城から来たキリシタンの貴人らと兵士らとは戻るために司祭に別れの挨拶をしに来た。現在司祭は、約二、三ヶ月の間、日本全土の最高の君侯である公方様や「殿」(Dono)の宮廷に近い都の上部に、そこでデウスの御法を説くために異教徒から何らかの家を借りることを実現できるかどうかを見るために動いているが、日本の人々は、特にここ（都）では高慢で一家言の持主なので、この三年の間この地では全く実現をみていないほどである。これが実現して（主への）大いなる奉仕がなされることを神の恩寵において我等は期待している。

ルイス修道士が豊後国へ戻る旅が迫っているので、また幾人かのキリシタンの要望もあり、彼と私とは復活祭の第二の八日目に、この都の街の幾つかの物を見物に出かけた。というのもここには非常に様々な種類のものがあり、そして気晴らしをするためにしばしばこの地の寺院や骨董品を見に出かけることが日本人の習慣となっているので、それらの珍しさを求めて他国総てから絶えず人々が見に集まって来るからである。しかし見た物総てを説明するのは不可能なので、本書翰において私が思い出すものについて述べよう。最初に約三十名のキリシタンと共に、日本全体の君主である公方様の宮殿を見に行き、キリシタンである、彼の一人の従者のとりなしで中に入り、[宮殿から]離れた、気晴らしに用いる幾つかの部屋を見た。私が生涯で見た、最も清潔で明るくそして豪華な家であり、ポルトガルでもインド全土でも、精巧さ、清潔さ、そして優雅さでこれに匹敵しうる家は見たことがない。この部屋の窓の前には、非常に清々しく珍しい樹木、ヒマラヤ杉、糸杉、松及び蜜柑のように見たことのある樹木と、同様に我

等の間では知られていないような他の樹木とのある庭園があり、総ての樹木が技巧により様々な形に、あるものは鐘の形に、別のものは塔のように、また別のものは[181v.]丸天井のようにと、様々な形になっている。百合、カーネーション、薔薇、雛菊そして花々は大量で色と香りは種々様々であり（彼の気晴らしに見られ栽培されている物であるので）、それを常に見ている者たちに（も）感銘をもたらし、それを見たことがない我等にはなおさら（感動をもたらすの）である。ここから我等は同じ宮廷のうちにある別の庭園を見に連れて行かれたが、こちらは第一の物よりさらに優っているように我等には見えた。彼の畜舎は杉で造られた家屋であり、公爵を接待することも十分可能であり、総て上質の敷物が敷かれており、馬は一頭毎に、床と側面とが板で造られた仕切りの中に分けられており、敷物を引いた部分は馬の世話をする人々が泊まるための場所である。

他の門から出るとそこは、長さはリスボンのルア・ノヴァの六倍ないし七倍、幅は二倍ほどもあろうかという街路に面しており、（道の）両側面とも同じ高さの青々とした樹木があり、我等の復活祭のために少なからず欲しく思われた。この道は、日本全土の最も名誉ある君主であり、古くは皇帝であったが現在ではもはや従う者のない内裏の宮殿に通じている。（その）内部には、そこに仕える者以外誰も入らないので、我等は単にその外部とその庭園とを見ただけだった。この都市の出口は、いずれの場所にしろ日本全土の涼風と野原の中で最も美しく眼を喜ばせるものである、というのは、全体で三〇〇レグワの海岸線があるであろうこの（日本の）島の中で、この都以上によい場所はないからである。

ここから我等は極めて真直ぐで、広い、そして平らな街路を進んだが、この街路は夜間その門により城のように閉ざされるのである。我等が通って行った距離は、リスボンのセ（司教教会）からボア・ヴィスタ街にあるエスペランサ聖母堂に至るほどであろうか。これらの街路はどこも商人と織布、緞子や他の絹織物の加工及び金の扇その他この地で用いられる物の製造に携わる職人との（街）である。この（街路の）中央に阿弥陀の一寺院があり、全市中最も参詣者が多く、そこには一日中、特に午後到店が閉

まり仕事が終わってから喜捨を与え偶像に祈るために大量の人々が群集する。我等に同行していたキリシタンの貴人はこの(都の)国の執政官のもので現在改築中の宮殿を見にこの寺院から我等を連れて行った。それについて書き記されうる多くの事柄の他に、単に一つの庭についてのみ述べ、[182]公方様の庭園(の樹木)についてのようにここで見た樹木の多様さに言及することはやめておく。庭の中央に長さ二〇パソの池があり、水源は一箇所で、金力にあかせて二、三レグワのところから引いてきて、丸で自然石のように見えるが(人の)手で切断された岩塊を伝って流入する。池の中には大小の島の形が多数あり、その一つから他へは清々しい木と石の橋により通って行ける。これら総てが大変青々とした樹木の下にあり、これについて三分の一も叙述することはできない(ほどである)ことは疑いない⁽⁷⁾。

時刻はまだ早く、またキリシタンたちが彼等の望みを果たすべく更に行こうと切望したので、もはや疲れてはいたが、そこから約半レグワ我等は連れて行かれ、途中で見た寺院には入らずに、最後に周囲を囲まれた非常に大きな森についた。その内部には五〇の僧院があり、その各々は、小さいものでもゴアのコレジオの敷地全体ほどの大きさで、他のものは二、三倍の大きさもあろうか、総て互いに別個である。そこには日本全土で最も高貴で最も尊敬されている僧侶(Bonzos)たちが居住している。というのはその上長も彼等の各々の者も国王の子息か、または高位の貴族階級の者であるからである。そして互いに隣接しているがために、その待遇においてと同じく建物の洗練と技巧においても他を凌ぐべく力を尽しているかに見える。そしてこれらの僧院は開かれたものではなく、誰にでも見せるものでもないが、同伴した同行者のおかげで我等には開かれた。これら総ての僧院の宗旨は、日本のほぼ総ての国王や君侯のものでもあるが、〔不
断の瞑想によって、そして僧侶らは瞑想に資質を有しているにもかかわらず

(7) この部分、Jap.Sin. 及びCEVでは"se não pode escrever nem a terça parte do que hé" (これについて、そのありさまの三分の一も叙述することができない)と"do que hé"が付加されている。

ず、生きることと死ぬことしかなく、この世の生の後には何もないことを確信することであり、そしてさらに瞑想によってこの宗派から得ることは、自らのうちの良心の呵責を総て消し去ることであり、この自由のうちに、墮落した本性が促し悪魔が勧めるあらゆる種類の悪習と罪に身を任せるのである。しかしながら我等はこれらの僧院のうち三つしか見なかったし、それも殆どぎっと（見る程度）だった。何故ならばそのそれぞれに何日もかけて見るべきものがあったからである。我等が最初に見た（僧院）は、現在豊後王の子息の一人が上長になるために捧げられているので、そのために大量の金銭を（王が）与えている。この僧院は非常に清々しいけれども、第二、第三（の僧院）には及ばない。我等が入った第二の僧院には優美な技巧を施した、我等のものとは大変異なった様式の大変美しい門があった。その門を入ると直ちに、全体に黒い四角な石が敷き詰められ、両側を、非常に光沢がある繊細なベニスの紙よりも滑らかで白い壁で仕切られた廻廊に至る。この廻廊に沿って、縁に入るとみえる庭が続くが、そこには人工の山の形のもの以外はなく、それはそのために非常に遠くから探し出された石で出来ており、その頂上に多種多様な小さい灌木があり、幅一パルモ半のそこに至る道と橋がある。地面は粗い、大変白い砂の所もあれば、黒い微細な石のところもありその間に高さ一コヴァド半の大きな石が幾つか突き出している。これらの（石）下には、薔薇の花と、季節に合せた花とが非常に工夫されて交えられ、一年中常に花と緑がここかしこにあるように（植えられている）。私は、これらの僧院のそれぞれの庭や家について言うべきことの多くを説明する術を知らないの、いと親愛なる兄弟たちには以下のことを知るだけで十分であろう、即ち、〔現世以外のものを期待しない者たちとして〕彼等はこれを単に現世の幸福と栄光と見なしており、パードレ・ガスパル・ヴィレラ [182v.] にも、ルイス修道士にも、私にも、突然にこれらの建物の美しさ、技巧と清潔さに直面する事態となった際に我等に起ったことに鑑みれば、初めてこれらを見た人々で大きな讚嘆に動かされない人は誰もいないと〔何の疑いもなく〕確信している。彼等が經典により祈る部屋とこれに隣接する部屋とは、我等が見た

こともない木材で造られている以上のものではないのに見るべきものは大変多いので、贅沢な絹や錦の敷物をことごとく用いる我等の総ての装飾が、これに比較すれば模造品に見えてくるほどである。三番目の僧院には見るべきものが多かったが、寺院は総て閉っていたために、ゴアのコレジオの教会のように四角な建物で、中で多くの人が瞑想していたのであろうが、我等の見られる場所は寺院の縁と庭しかなかった。(しかし) ここには、見て書き送るべきものは、以前に述べたこと総てよりも確かに少なくはなかった。我等が外国人であり、多くのキリシタンに伴われて行ったために我等を見に僧侶たちが出てきて、我等が新しい教えを説き、弟子たちを集めるために都に来た「デウス」(Deoses)であるかと尋ねた。というのは(彼等は)我等やキリシタンのことをそう呼ぶからである。これらの僧院の一つの出入り口に六、七人、多数の色の華美な絹衣をまとった少年たちがまた我等を見に出てきた。彼等は総て高貴な人々の子息であり、僧侶になり、[我等の間の司教や大司教のような] 彼等の間での地位になるために養育されている。[これらの少年たちの何人かは、彼等の忌まわしい罪を身につけており、これは甚だ広まっているために、単に僧侶のみならず国民一般までがこれを、その不潔さの故に妻を持たず任意に少年を用いる聖なる行為と見なしているほどである。そしてより多くの少年を持ち、路を行く時に自分の前に、ないし自分と一緒に(より多く) 彼等を連れている僧侶は、その分だけより名譽あり、より良心的で純粹であると判断されるのである。]

既に遅くなっているので、修院に帰る途中である大きな寺院を通り過ぎた。その中央には金銀の細工を施し、多様な色を塗った木製の塔があり、軸の周りを回転するもので、沢山の引出しで埋まった幾つかの仕切りで分けられており、そこに釈迦の書いた総ての書物(経典)を収納しているが、その書物の量たるやこれだけのものを著述する人間が存在するとは思われないほどである。誰でも立ったまま、或いは座ったままこの塔を回転させて、見たいだけ書物を一箇所から動くことなく見ている。これら(の塔)はこの宗派が起こったシャムで、そして中国の沿岸から日本までの海岸線

全体に広まっており、そしてシャムからペグやベンガラを通過してピスナガに至る総ての国に広まっている。そして日本、中国そしてシャムにおける宗派の違いは〔その地域では（それなりの）解説書を与えるであろう釈迦の書物に関する説明の多様性と、〕同じ偶像が別個の名前をもっていること以上のものではない。

我等が来る時に⁽⁸⁾更に神と地獄の審判官に奉げられた別の寺院を見た。その（寺院の）彫像は巨大な象のようであり、えも言われぬほど醜悪で身の毛もよだつ代物である。これは手に審判を行う笏をもち、両脇にある別の二つの悪魔の彫像は、どちらも人間三人分の身長がある。一方はペンを手しに罪人の罪を書き記しており、他方は読み上げるための紙のような板（を手している）。壁には多様な地獄の責め苦が[183]それに苛まれる男女やそれを与える悪魔等の多数の姿とともに描かれている。この建物には祈りを捧げたり、喜捨を行うために（人々が）頻りに訪れる、というのはここには地獄の王に、これらの苦しみから解放してくれるよう不断に（人々が）懇願しに来るからである。

翌日、それは復活祭の最後の第八日であったが、ここに主だったキリシタンのうちの一人の貴人が司祭に、聖週に行った労苦に報いるために気晴らしに行くこと、そしてまた異教徒の説教を、そのやり方を見るために聴くことを懇願する使者を寄こした。司祭はこれに同意し、我等はここから多くのキリシタンと共に都の外に出て僧侶と尼僧との、ある僧院に通じる掌のように平らな道路に入り、出かけた。その道路は、リスボンのルア・ノヴァの幅は三倍、長さは約十倍もあろうか。多くの男女がやって来るのを見たが、その全員が数珠を手しに祈りに専念していた。どういうことなのか知りたいと、キリシタン達に望んだところ、（キリシタン達は）我等に、彼等は説教を聴き終え僧院から出て来たところだと言った。また大量の人数がいたため、人数がどれくらいか訊いたところ、（答えた者達は）それについて既に経験があり、我らへの答えは、恐らく五千人であろう、毎年

(8) Jap.Sin. ではこの部分、"quando nos tornamos"（我らが帰る時に）となっており、CEVも同じく"quando tornamos"（我らが帰る時に）となっている。

この時期に連続して百日間の説教が行われるのが習慣であり、総て（の説教）が一人の説教師によってなされ、この百日の終りに聴衆に対して大量の免罪符が許されるとのことであった。

そこから我等は、諸国から免罪符を入手するためにこの都に来る巡礼者で驚くべき賑わいを見せている、別の寺院に行った。〔その巡礼者たちは〕祈りを行った後、行列を作って数珠により祈りながら寺院の周囲を何周か歩き、（寺院の）入口の正面に跪いて顔を地面につけ、それによって免罪符を得るとみなすのである。〕そして日本の総ての国で毎年この祇園（Guiaño）と称する偶像に対して、〔恰もキリスト教世界での聖体祭の日ともいうべき〕派手な祭りが行われるが、そこでは無言劇や当の偶像に関する古代の文物や諸事を表すために当該地域の職人らによる模造など様々な種類の趣向が行われる。

この寺院を、美しい松のある別の道路を通って出ると、我等が向かっている、ある僧院に行く途中の人々が甚だ多く集まっているのがみえたが、そこではその時説教が行われることになっていた。その場所は高いところなので、その麓へ着いた後、そして未だ始められていないのを知って、我々は長いことそこに留まっていた。というのは、キリシタンたちが、僧侶らは我等がその寺院にいることに勘付いたならば、たぶん我等が立ち去るまで説教を始めないかも知れないと言ったからであり、彼等の説法において、（僧侶らが）行う方法を、我等は是非見聞したいとの欲求ゆえに、いわば、かなり狼狽しながら待ったのである。というのは、説教の始まる前の一時の間、これら聴衆総ては数珠をもって跪き、能う限りの信心を外面に表して手を挙げ、彼等に対して打ち鳴らされる小さな鐘に合せて高い、非常に悲しげな声で、そして何人かは涙を浮かべて、[183v.]全く途切れなく南無阿弥陀仏と言い続けていたからである。そして彼等にとってこの名前は非常に心地よい楽しいものであるので、路上でも家でも、売買をしながらも常に歌の様々な形で唱えるほどであり、そして殆ど総ての喜捨を乞う人々がこの名前を用いて乞うのであるが、彼等を救う神である阿弥陀の名を呼んでその力に頼ることに他ならない。学者たちは民衆に向けた彼等の

説教の中で、「一念弥陀仏即滅無量罪」、即ちその意味は、心から阿弥陀の聖なる名を唱える者は総て、全く疑いなく救われる、と言い、〔更にこれにつけ加えて、この聖人阿弥陀がこの世で引き受けに來た贖罪と労苦は無限であり、総て人類の救いのために（阿弥陀に）課せられており、そして阿弥陀は無限であるので、（贖罪と労苦）の必要はない、と言っている。そしてここから彼等の中で別の教えが生れたが、（それは）人間にとって何らの形の贖罪も必要ない、なぜなら阿弥陀がその功德によって犯す可能性のある総ての罪から人間を救ったからであり、単にその恩恵に感謝を捧げることだけが必要なのだと言うものである。〕

（聴衆の念仏を）中止するように、別の大変大きな鐘により三度合図がなされ、我等はそれにより説教師が入場したことが分った。そこで僧院へ向って上方に登ったが、そこは入口や廂まで男女で一杯であり、殆ど二千に達する人数が居ようだった。〔祭壇の前には高さ一コヴァド半の燭台があり、説教の間火の灯っている太い蠟燭が一本そこにあり、その火により説教師が教理によって（説教を）人々に与えていることを表示していた。〕祭壇の段には多くの僧侶が両手を衣の中に入れ、視線を地に向けて座っていた。説教師は全員から見えるように高い椅子に座り、面前に小さな机を置き、その上に一冊の本を置き、絹の長い衣で、下に白衣をその上に紫の衣を着て、手に金の扇を持っていた。四十五歳と思われる男で、〔色の白さからはドイツ人であるようにみえた⁽⁹⁾。〕これまで見た男の中では最も容貌の良い者の一人〔であった。〕（キリシタン等が）我等に言うには、非常に高貴な生まれとのことである。説教師が説教の中で見せたその声、成熟、温和さ、そして立居振舞は、間違いなく尊敬に値するものである。説法のやり方は、彼の前に置いた書物の内容を一節読み、それから非常な才気をもって説明するのであるが、（その才気たるや）内容を理解できるガスパル・ヴィレラも、その場に居合わせた他の者たちも、彼の優れた技術とやり方に感嘆するほどのものであった。そしてこれからキリシタンたち

(9) 活字本について、CEV、CCOJは〔〕内を省略しているが、CCOAのみ〔〕内を収録している。

に対して、彼等の嗜好と言語に合せて説法する際により良く振舞うために幾らかの教訓を引き出すためにも、(説教を聴きに)行ったことの利益は少なくなかった。一般にこの地の説教師たちは雄弁で学問があり、民衆から最高度に尊敬されている、というのは生きている限り彼等を絶対的に尊敬するからである。我等はこの説教師が、多くの魂にもたらしうる果実の故に、キリシタンになるのを見たいと強く望んでいるが、しかし彼等は強くその名誉と結びつき、その罪に縛られ、多くの不品行で満ちているが故に、彼等について我等が理解したところに従えば、たとえデウスの御法以外に他の救いはないと彼等が明らかに知っていたにしても、この世俗的な名誉と民衆が彼等に抱いている評判とを失わないために、我等の御法において救われるよりは彼等の宗派の中で滅びる方を望むであろう。説教の結局行き着くところは、聴衆にこの世の人生の如何なる様態においても、阿弥陀の聖なる名を崇め、深く最大限に尊崇することを、彼にこそ確かな救いがあるが故に止めてはならない、[184]そして、総ての教えが由来する源泉であるが故にこの宗派以外の他の宗派に従ってはならない⁽¹⁰⁾ことを納得させるものであった、[丸で他の事柄は心にないかのように揺るぎなく、確乎としてこれを言いつつ。(しかし内実は)反対である。何故ならこれら総ての日本の憐れむべき学者たちが、最終的に基づき確信しているものは、救いをもたらすことの出来る釈迦や阿弥陀は存在せず、彼等(釈迦や阿弥陀)は彼等(説教師)と同じく生れ死んで行く人間以上のものでもないということだからである。それなのに彼等はこのことをはっきりとは言わないが、それは]民衆を欺いて導くためであり、これら民衆を恐れているために⁽¹¹⁾、[誤った救いの期待を与えるためである。]この異教徒が彼等の偶像に対して有する信仰と崇敬は奇異である。三、四日前になろうか、親族全員の中で彼にのみ、主がその慈悲によってその聖なる信仰を知

(10) Jap.Sin. では意味内容はほぼ同様であるが、その原文は "que nenhuma outra seita seguissem senão esta por ser a fonte donde todas as leis manauão" となっており、CEV はこれに基づいていると思われる。

(11) "com medo delle" (民衆を恐れているために)の部分、Jap.Sin. 及び CEV では "comendo delle" (民衆を食い物にして)となっている。

らしめた若者がここにやって来た。そして彼の母が彼に同情し、道を誤った者と彼を見なして、「息子よ、何のために汝の魂を失いたがるのか、そして、汝の先祖たち総てが崇め、甚大な恩恵を受けてきた汝の神阿弥陀を崇めることを放棄するのか」と、彼ほど信仰のない者は容易に心動かすようなその他多くの言葉も用いて言いつつ、示した憐みを我等に語った。

確かに、いとも親愛なる兄弟たちよ、聖霊の大いなる刺激と働きかけがなければ、我等の主がその栄光の中に入らしめた司祭フランシスコ師は、発見された最果ての地に、創造主からこれほど遠く離れた国民を、大いなる渴望をもって捜し求めて来ることはなかった、何故ならば彼等の文明、待遇、そして習慣において（我等の司祭フランシスコ師が言ったように）多くの点でスペイン人よりも優っているからである、それを言うことは不面目であるが。そしてもし、シナから来る人々が未だ日本についての大きな名声を認めないとすれば、それは彼等が商人や海岸線に沿って居住している殆ど洗練されていない人々としか会ったり言葉を交わしたりしないからであり、この人々は都の国の人々と比較して、宮廷人に比較したペイラの住民よりもずっと劣っており、ここ都では彼等は田舎者と呼ばれる。

非常に驚くべきであり、総ての善なるものの創造者に無限の感謝を捧げるべきは、日本の教えの源であるこの都の地で、その（創造者の）至聖なる御法が、これほど英知と人々の好意が乏しく、またその道具が任務にこれほど値しない中で認められ始め、それも特に高貴な人々に受け入れられるべく、かくも見事に聖なる摂理の計らったことを見ることである。彼らが純粋にその救いよってのみ心を動かされ、また明晰かつ明白な理性よってデウスの御法以外に（救いが）ないことを知るにより、進んで（御法を）奉じており、それに十分成功していることは、ここで活動している（我等）宗教人たちを疑いなく狼狽させているほどである、特に（彼等が）祈りを行い、何度もの告解を非常に喜び、デウスの事柄を話し、そしてこれまで見たどの国民よりも悔悛を好む明敏さを見て、自分自身の不熱心の刺激としている私を。[この手紙が既に長くなり、尊師らを退屈させているかも知れない。またリアン修道士⁽¹²⁾が明朝旅立つことになって

(12) Jap.Sin. では "irmão Luis" (ルイス修道士) となっている。

おり、真夜中近いのでこれ以上長く（書くの）はやめ、単に我等が主にして救い主なるイエス・キリストの血と、特別の記憶であるその至聖なる受難と死の無限の功德において、この地において我らが大いに [184v.] 必要としている尊師らの援助に代えて、尊師らの聖なる献身と祈りに我等を委ねることを請うことにする、これらの大量の人々が（主）を知り、仕え、そして愛するために主がその心を動かすべく望まれんことを、そしてこの短い一日の終りに我等ある者総てに永遠の栄光と至福の啓示をなさんことを主に祈願しつつ。] この都の街より一五六五年四月二十七日。

諸人の無益な下僕にして尊師の不肖なる兄弟 ルイス・フロイス

II 翻刻

◎ 凡例

- (1) エヴォラ版『日本通信』収録の写本になく、*Cartas do Japão* 収録の写本にある部分は、[] により提示した。
- (2) 翻刻にあたり、*Cartas do Japão* 収録の写本と他のテキストとの言葉の異同の一部を本文中で示すために、*Jap.Sin.* 文書のテキストは〈〉により、またエヴォラ版『日本通信』のテキストは{|} により提示した。

◎ 本文

[180]

Cópia da terceira carta que o padre Luis Froes escreueo de Meaco ao Collegio de Goa a 27 d'abril de MDLXV

[A graça & amor eterno de Jesu Christo Nosso Senhor faça continua morada em nossas almas, Amen. Duas cartas muy largas lhes tenho escrito desta cidade de Meaco os dias pasados, polos primeiros mesageiros que daquy forão pera Bungo. E porque depois sobreuierão algumas cousas que folgarão de saber, pelo padre Gaspar Vilella ter outras occupações de

importância me disse que por sua commissão as escreuesse, E] começando polo seruiço que a Nosso Senhor se fez esta coesma, direy o que delle me lembrar. [Foi daquy o padre Gaspar Vilella alguns dias antes da coesma uisitar alguns senhores conforme ao custume da terra, E confesar os Christãos que estão nas fortalezas de Imory, Nara, E Saua. E Bautizando alguns que estauão instruidos, tinha determinado ir-se da terra uinte ou trinta légoas adiante por ter nouas que em hum lugar como as caldas onde concorre muita gente de diuersos reynos [180v] a curar-se deseiauaõ ouuir as cousas de Deos. Estando já prestes pera se partir ao outro dia chegou recado que o irmão Luis E eu estauamos muito enfermos neste Meaco pelo que foy forçado dilatar a ida pera outro tempo. E ver-se <uir-sse> logo aquy na entrada da coesma, aprouue ao Senhor que com sua charidade E diligência conualecemos em breue.] O exercicio da coesma foy pregar o padre aos domingos o euangelho. Às quartas pregou hum irmão Iapão por nome Damião do sacramento da penitência, declarando aos Christãos por extenso as partes que a confissão requeria. Às quartas a noite depois das ladainhas ouue disciplina[sic] sempre de todos os de casa, & de alguns de fora. Às sextas depois da missa pregaua hum moço a paixão, a noite a junta dos muitos Christãos lhe tornaua o padre a resumir a pregacão presedente com algumas cousas, que os prouocassem a deuacão, & no fim dizendo o salmo do Miserere mei deus se disciplinauão todos com muita deuacão & feruor. Domingo de ramos conforme ao pequeno sítio de casa fizemos procissão com o mais requisito daquelle dia. Começarão logo a uir pera as endoenças, E páscoa muitas pessoas de dez, vinte, & trinta légoas, antre os quais uierão alguns fidalgos nobres com suas molheres & filhos, & posto que uinhão em caualos, & andas não deixauão de ter boa matéria de mericimento com muita ágoa que lhes choueo aquelles dias. Confessaria o padre obra de dozentos & cincoenta Christãos, quinta feira do endoencas lhes pregou o mandato, & ante de lhes dar o santíssimo sacrameto lhes

tornou a fazer outra prática de muito amor, comungarão obra de sesenta pessoas com tantas lágrimas, E soluços, que por certo nos punhão em grandíssima confusão. O yrmão Luis tinha feito dentro na capella hum sepulchro muito rico, aonde se encerrou o santíssimo sacramento, nem faltarão armados de mui ricas, & fermosas armas que uigiarão até se desemcerrar o Senhor. A tarde, os Christãos por naturalmente serem inclinados a penitência, lá negoçarão antre si uestimentas pretas, coroas de espinhos, disciplinas de rosetas, & diante do santíssimo sacramento uierão por três uezes, & derramarão muitas lágrimas, & sangue. A noite acabado o officio de treuas, que foi o primeiro, que elles uirão <uierão> , com as candeas apagadas, lhe pregou hum menino Iapão por espaço de huma hora E mea ou duas, a letra da paixão colegida de todas os quatro euangelistas. E depois sobre os passos mais essenciais lhe fez o padre huma prática exortando-os a penitência, & ao sentimento da paixão de Christo Nosso Senhor, & depois de os ter mouidos ouue disciplina com tanto feruor, lágrimas. & deuacão, que sem duuida nos deo bem matéria de glorificar a Deus por ser cousa tão noua neste ultimo do descuberto, E por sua sacratíssima paixão ser celebrada, & ensalcada em terra de tantas idolatrias aonde hé o demônio tão uenerado. E o desemcerrar do Senhor a sesta feira foi conforme ao que se faz em tal dia, sabado se fez o officio com muita alegria & consolacão dos Christãos depois de se benzer a ágoa, & o cirio pascoal, E ditas as profecias, E ladainhas começou o padre a missa com hum ornamento de borcado [arezoado que cá está, que os Christãos folgarão de uer.] Depois de mea noite esta[181]ua esta casa chea de Christãos fidalgos muito nobres E molheres, todos muy ricamente uestidos esperando pola missa & procisão da resorreicão. Disse o padre duas horas ante menã missa cantada e depois com o santíssimo sacramento se fez procisão com grande consolacão de todos. Comungarão alguns Christãos. E no fim da segunda missa lhes pregou hum irmão o mystério da

resorreição.

Os Christãos de Meaco tem por costume por o padre assy o ter ordinado, que pera mais se unirem em charidade E amor, polo natal E páschoa dêem aquy de iantar a todos os Christãos que uêm de fora, E os mesmos fidalgos que auião de ser conuidados de suas casas mandarão trazer ao Meaco a maior parte do que se há de gastar. Aiuntados aquy todos os principaes em casa comerão E praticarão das cousas de Deus até tarde & cantarão algumas cousas em louuor do Senhor. E polos gentios ouirem por fora o rumor da gente, E tendo também notícia do concerto da igreja E altar, fizerão grande instância que os deixassem entrar dentro, não se pôde negar-lhes isto. As mais das molheres que entrauão postas de giolhos com as mãos aleuãotadas diante do altar adorauão a imagem do Christo Nosso Senhor. À noite & ao dia seguinte se uierão a despedir do padre os fidalgos & soldados Christãos das fortalezas pera se tornarem. Anda agora o padre, pera uer se pode effectuar alugarem pera os gentios alguma casa perto dos paços do Cuboçama ou Dono que são os supremos senhores de todo Iapão no Meaco de riba pera lá pregar a ley de Deos alguns dous ou três meses, mas hé a gente de Iapão especialmente aquy tam soberba e chea de opinião que de três annos a esta parte nunca isto pode auer effecto. Esperamos no diuino fauor que auendo-o se lhe faça muito seruiço.

Polo irmão Luis estar de caminho pera se tornar pera Bungo fomos elle E eu a segunda oitaua da páschoa, por também no-lo pedirem alguns Christãos, uer algumas cousas desta cidade do Meaco, por auer aquy muita diuersidade dellas E ser costume dos Iapões irem muitas uezes por esparecer uer os templos E antigualhas desta terra, que pella nouidade delles de todos os outros reynos continuamente concorre gente a ue-llas. Mas porque não hé posiuel pode-las explicar todas, direy nesta das que me lembrarem. Fomos primeiramente com alguns trinta Christãos uer os paços

do Cuboçama que hé o senhor de todo Iapão E por intercessão de hum
criado seu Christão tiuemos entrado E uimos huns aposentos que têm pera
sua recreação separados [dos paços]. A mais limpa, alegre, E lustrosa
casa que vy em meus dias, nem me lembra auer uisto em Portugal nem em
toda a Índia casas que em primor, limpeza, E graça se lhe posão igualar.
Defronte das ienillas deste aposento estaua hum iardim das mais frescas E
estranhas aruores que vy, assy de cedros, aciprestes, pinherios, E
laranjeiras como d'outras aruores não conhecidas entre nos, E todas por
artificio criadas de maneira que ficão humas sendo a meneira de sinos,
outras como torres, outras [181v] como abobadas, E assi de uarias
maneiras: os lirios, crauos, rosas, boninas E flores sam tantas E tam
diuersas cores, E cheiros (por ser a cousa em que mais se reuem E
exercitam por seu passatempo) que aos que as uêm continuamente causa
<causão> admiracão quanto mais a nos, a quem ellas são tão estranhas.
Daqui nos leuarão a uer outro jardim nos mesmos pacos que nos pareceo
de muita mais auentaem que o primeiro. A sua estrebaria hé huma casa de
cedros em que bem se podem agasalhar Duques, toda esteirada de esteiras
finas, E os caualos cada hum separado em seu repartimento de tauoado por
baixo, E polos ylharguas, E o campo todo que está esteirado hé pera se
aguasalharem os que das mesmas bestas têm cuidado.

Em saindo por outra porta demos em huma rua que podia ser de
comprimento seis ou sete uezes como a rua noua de Lisboa, E duas uezes
tam largas, toda de aruores mui frescas y iguaes de huma banda E de
outra, que não pouco cobicamos pera huma resurreição. Vay dar esta rua
nos pacos do Daire que hé o senhor da mais honra de todo Iappão,
antiguamente emperador, mas yá agora não obedecido. Estes uimos somente
de fora, E hum jardim seu, porque ninguem entra dentro senão os que o
seruem. As saidas desta cidade que qualquer parte são as mais lindas E
alegres aos olhos de frescura E campos que há em todo Iappão porque

trezentas légoas que esta ilha pode ter de costa em toda ella não há melhor sítio que ho de este Meaco.

Daqui fomos por humas ruas muito direjtas, larguas E chãos que todas se fechão com suas portas de noyte a maneira de fortaleza. E seria o espaço das porque passamos como da sé de Lisboa até nossa Senhora da Esperanca de boa uista. Todas estas ruas são de mercadores E officiaes de tecer E de lauar damascos, E outras sedas, E fazer auanos douro E as mais cousas que seruem na terra. No meyo de ellas está hum templo de Amida o mais frequentado de toda a cidade, aonde todo o dia, especialmente a tarde depois que se fechão as tendas E estão desoccupados, há grandíssimo concurso de gente a darem esmolas E fazerem oração ao paguode. Deste templo nos leuarem <leuarão> os fidalgos Christãos que hião comnosco a uer huns pacos que agora se reformão{reformatarão} que são do governador de todo este reino, E além das muitas cousas que delle se podião escrever somente lhe direj de [182] hum jardim seu, E não tratando da diuersidade das aruores que alli vimos como as dos jardins do Cubocama. Tem no meyo do jardim huma alagoa de vinte passos de comprimento, de ágoa singular, a qual trouxe, a poder de dinheiro, dalj a duas ou tres légoas, E entra-lhe dentro por hum rochedo de penedia talhado a mão que parece obra da mesma natureza. No meyo destas <desta> alagoas <alagoa> há muitas maneiras de jlhas E jlheosinhas que se passão de humas às outras com pontes muito frescas de pao E de pedra. E tudo isto fica de baixo de muy frescas aruores E sem duuida que disto são <se> se <não> pode escrever nem a terça parte.

Por ser ainda sedo, E os Christãos nos empurtunarem que fóssemos mais adiante por satisfazer a seu desejo, posto que iá cansados, nos leuarão day a obra de mea légoa deixando os templos que neste espaço uimos, chegamos por deradeirro a hum bosque muy grande todo cercado, o qual tem dentro em si sincoenta mosteiros E cada hum pollo menos poderá

ser tamanho como todo o sítio do Collegio de Goa, e outras duas ou três vezes maiores, todos separados huns dos outros. Aonde residem os mais nobres E uenerados Bonzos de todo Japão, porque as cabeças E cada hum delles ou são filhos de reys ou pessoas de muita qualidade e nobreza, E por estarem tão uisinhos, parece que cada hum trabalha por exceder aos outros assi na polícia e artificio da casa como em seu tratamento. E posto que estes mosteyros se não abrem nem deixão uer de toda pessoa se nos abrirão polla compahia que leuauamos. A seita que todos estes mosteiros seguem hé, E quasi todos os reis e senhores de Japão têm, é [persuadir-se por continua meditação, e posto que para isto dão os Bonzos que não ay mais que uiuer E morrer E que depois desta uida não há nada,] E aquelle que polla meditação mais alcança desta seita hé extinguir E agapar em si todo o remorso da consciência E postos nesta liberdade, se dão a todo genero do uícios e peccados a que a natureza corrupta os inclina E o demônio os persuade. Não uimos todauia mais que três mosteiros destes, e ainda quasi de passagem, porque em cada hum delles auia que uer muitos dias. O primeiro que uimos está agora dedicado pera hum filho delrey de Bungo ser superior delle que para isso dáa grande soma do dinheiro. Este com ser quão fresco, se pode dizer, não se chega ao segundo E terceiro. No segundo em que entramos estaua huma porta muy fermosa de gentil artificio, e maneira por outro modo muy defferento das nossas, por ella demos logo em hum corredor todo ladrilhado de pedras pretas quadradas com humas paredes de huma banda E de outra, mais lizas E aluas que papel de Veneza muito bornido e fino, ao longo deste corredor uay hum jardim que depois de entrar noutra uaranda se uêe, o qual não tem outra cousa senão huma maneira de serranias feitas a mão de pedras que trazem de muito longe buscadas pera aquello, em sima das quaes ay muita diuersidade de aruoesinhas pequenas e caminhos e pontes por onde se uay a ellas de largura de hum palmo e meo. O chão em partes hé de huma area

grossa E muy alua e em outras de pedras meúdas pretas dentre as quas saem humas grandes de altura de couado E meo, E dos pés destas mil inuencoes de rosas, flores entresechadas <antresachadas> de maneira accommodadas ao tempo que em todo anno ou humas ou outras sempre estão floridas E uerdes, e porque me não sey explicar do muito que há que dizer de cada jardim e casas destes mosteiros basta saberem charíssimos irmãos que têm isto somente por sua felicidade e gloria nesta uida [como quem não espera por outra, E sem duuida] tenho pera mi <mim> , pollo que ao padre Gaspar Vi [182v.] lela E ao irmão Luis e a mim nos aconteceu em subitamente dar de rosto com a lindeza E artificio E limpeza daquellas casas que nenhuma pessoa as poderá uer a primeira uez que não sinta em si grande sobresalto de admiração. A casa dedicado pera rezare <rezarem> por seus liuros e outras câmaras iunto della têm tanto que uer com não terem mais que serem somente de hum genero de madeira numqua uisto entre nos, que todas as nossas paramentadas de toda a tapeçaria rica de sedas E borcados se nos representariam ser cousa contrafeita em comparação disto. No terceiro mosteiro auia muito que uer, mas por estar o templo todo fechado, que será em quadra como a ygreia do Collegio de Goa noua, e muita gente dentro meditando, não ouue lugar pera uermos mais que as uarandas do templo E jardim que por certo não auia nisto menos que uer e escreuer que em tudo o que atrás disse. E por sermos estrangeiros e irmos bem acompanhados dos Christãos nos sayrão muitos bonzos a uer E perguntauão se éramos nos os Deoses que uinhão pregar a ley noua ao Meaco E congregar discipolos porque asi chamão a nos e aos Christãos. A huma porta de hum destes mosteiros nos sayrão tãobém a uer seis ou sete meninos uestidos de seus saios de sedas de muitas cores lustrosas. São todos estes filhos de pessoas nobres que alli se crião pera serem bonzos E pera humas dignidades que há entre elles [como bispos ou arcebispos antre nos, e destes mininos uzão em seus nefandos peccados, E

isto tão corrente que não somente os bonzos mas ainda o pouo o tem por cousa santa, não terem molheres por sua immundícia, mas usarem ad libitum de meninos. E o bonzo que mais meninos tem E os leua diante ou iunto de sy quando uay por huma rua, esse hé mais honrado E iulgado por de melhor consciêntia E pureza.]

Tornando-nos pera casa, por se ir fazendo já tarde, pasamos por hum templo grande, no meio doqual está huma torre de madeira laurada de maçanaria E pintada de muitas cores, que anda sobre huns exos <eixos> a rroda, que se diuide em repartimentos cheos d'escaninhos que têm todos os liuros que escreueo Xaca que hé tanto conto de liuros que parece não auer pessoa humana que tal escreuese. De maneira que estando qualquer pessoa em pé ou asentada andando com a torre a roda, está uendo quanto liuros quer sem se mudar de hum lugar. E estes são os que correm em Sião onde se leuanteou a seita E por toda a costa de China atée Iapão, E de Sião corre por Pegû E Bengala E todos aquelles reynos atée Bisnegâ, E a discripância do que lá poderá auer nas seitas do que há em Iapão, China, E Sião, não hé mais que [a uariêdade da exposição da escritura de Xaca que lá lhe poderião dar os expositores] E terrem os pagodes outros nomes com serem os mesmos.

Vimos mais quando nós uiemos <tornamos> outro templo dedicado ao Deus E juiz do inferno, cuja estátua seria como hum grande elefante, das feas E horrendas cousas que se podem dizer. Este tem na mão hum cetro pera iulgar, E outros dous demônios às ilhargas da estatura de três homens, cada hum. Hum delles tem huma pena na mão, escreuendo as culpas dos peccadores, E outro huma taboa a maneira de papel por onde as lia. Nas paredes estão pintadas muitas calidades de tormentos do inferno com muitas figuras [183] de homens, & molheres que as <os> padecem E hos demônios que lhos dão. Hé muito frequentada esta casa de orção E esmolas, porque continuamente aly uão pedir ao rey do inferno que os liure

daquellas penas.

Ao dia seguinte que foy a derradeira oitaua de páschoa mandou aquy hum fidalgo dos principais Christãos pedir ao padre quisesse{que quisesse} polo trabalho que tinha leuado na somana santa ir esporecer, E que também ouuiria huma pregação dos gentios pera uer a maneira que tinhão em o fazer. O padre lho concedeo, E fomos daquy com muitos Christãos, E em saíndo fora da cidade, E começando de entrar por huma rua cham como huma palma que vay dar em hum mosteiro de Bonzos E Bonzas, a qual poderá ser de largura três uezes como a rua noua de Lisboa, E de comprida algumas dez uezes. Vimos uir hum grande numero de gente, homens E molheres, E todos que a occupauão com suas contas nas mãos rezando. Quisemos saber dos Christãos o que era, diserão-nos que saião então daquelle mosteiro de ouuir pregação, E por ser a multidão da gente tamanha, lhe perguntamos que numero podia ser, E responderão-nos, como homens que já disse tinhão experiêcia, que poderião ser cinco mil almas, que era costume cadano naquelle tempo terem cem dias arreo de pregação, todas recitadas por hum pregador, E que no fin destes cem dias erão concedidas aos ouuintes grande numero de indulgências.

Daqui fomos a outro templo frequentado estranhamente de peregrinos que uêm de diuersos reinos ganhar indulgências a este Meaco, [E feita sua oração andão ao redor do templo em procissão certas uoltas rezando por suas contas, E pondo-se defronte das portas em giolhos com os rostos em terra, E com isto têm que as ficão ganhando,] E em todos os reynos de Iapão se faz cadano huma asinalada festa a este pagode que se chama Guiuão [como dizermos na Christandade o dia de corpos Christi,] a donde se fazem muitos generos de inuenções assy de momos E contrafazerem os officios da mesma terra como representarem antiguidades E cousas de mesmo pagode.

Deste saímos por outra rua de mui fermosos pinheiros, E uimos muito

concurso de gente que corria a hum certo mosteiro pera onde nós hiamos, no qual auia então d'auer pregacão. Depois de chegados ao pé delle, por estar posto em hum alto, E sabendo que não era ainda começada, nos detiuemos hum grande espaço por nos dizerem os Christãos que se os Bonzos sentisem que estauamos nós no templo, pola uentura a não começarião atée que nos fôsemos, E pelo desejo que tinhamos de a ouuir E uer a maneira com que procedem em suas pregacões esperamos, E como digo com asaz confusão nossa, porque antes de se começar a pregacão, por espaço de huma hora está todo aquelle auditório de giolhos com suas contas, E mãos aleuantadas com a maior deuação exterior que dizer se pode, ao som de hum sino pequo <pequeno> que lhe tanger, dizendo em uozes altas E muj sentidas, E alguns com muitas lágrimas sem [183v.] nenhuma intermissão Namu Amida Ambut. E é lhe a elles este nome tão suaue e iocundo que por caminhos E casas, comprando E vendendo, o andão dizendo sempre com muitas maneiras de cantares, E assi quasi todos os que pedem esmola, com este nome a pedem, que não hé mais que inuocar o nome de seu deus Amida, que os salue. E dizem os letrados em suas pregacões ao pouo, ychinem Midabut sucumet murioo zay, cuja significação quer dizer, todo o que diser de coração o nome santo de Amida, não há nenhuma duujda, senão que se salua, [acrecentando majs a jsto, que toda a penitência E trabalhos que nesta vida veo <uejo a> padescer este Santo Amida que forão infinitos, todos se applicão creio pera a saluação das gentes, pois elle, sendo infinito, delles não tinha necessidade. E daqui se aleuantou outra ley entre elles que dizem não ser necessário aos homens fazerem nenhuma maneira de penitência, pois Amida com seus merecimentos os saluou de todos os pecados que podião fazer, somente dar-lhe as graças por este benefício.]

Fazendo-se sinal de três badaladas em outro sino muj grande pera que acabassem, E entendemos por elle ser o pregador entrado. Nisto nos fomos

arriba ao mosteiro o qual estaua cheo atée as portas E varandas de homens E molheres que poderião ser pouco mais ou menos atée duas mil pessoas. [Diante do altar estaua hum castiçal d'altura de hum côuado E meio com hum círio grosso açesso que arde em quanto se prega significando o lume que o pregador dáa ao pouo com sua doutrina.] Pellos degraos do altar estauão mujtos Bonzos assentados com as mãos metidas dentro no abito E os olhos no chão, O pregador assentado em huma cadeira alta pera ser de todos visto, com huma mesa pequena diante de sy, E sobre ella hum liuro, E elle vestido com humas roupas de seda compridas, a debaixo branca, a de cima roxa com hum abano douro na mão. Poderja ser homem de quorenta E cinco annos, [em sua aluura parecia hum Alemão. Foi ser] hum dos bem asombrados homens que tenho visto, diserão-nos que era de geração mujto nobre: sua voz, madureza, brandura, E acções que tinha na pregaçam por certo que era muito pera se considerarem. A maneira que tinha em proceder em seu sermão era ler hum passo polo texto do liuro que diante de sy tinha, E depois o explicaua com tanta graça que o padre Guaspar Villella que o entendia, E os majs que se aly acharão vinhão admirados de sua boa arte E modo: E não aproueitou tão pouco esta jda que daly senão tomasem algumas lições pera melhor proceder com os Christãos em as pregacões conforme a seu gosto E língua. São comumente os pregadores nesta terra os homens majs eloquêntes E letrados E do pouo em sumo grao venerados, porque absolutamente em vida os adorão. Mujto deseiamos uer este pregador Christão pollo muito frujto que em muitas almas dahi podia resultar, mas estão elles tão casados com suas honrras, & atados a seus peccados & cheos de tantos uícios que, ao que delles temos entendido, ainda que lhes constasse claramente não auer outra saluacão senão a lei de Deus, por não perderem esta honrra mundana, E opinião que o pouo delles têm concebida, antes se quereriam perder em suas seitas, que saluar em nossa lei. O em que se

resoluiu a pregação era persuadir aos circunstantes, que em nenhuma forma desta uida deixassem de uenerar, & ter intima reuerência & acatamento grãdíssimo ao nome santo de Amida porque nelle tinham certa a saluacão & que nenhuma outra ter[sic] seita seguissem senão [184] esta, & que nenhuma outra por ser a fonte donde todas as leis manão, (dizendo isto com huma firmeza, & estabilidade como se outra cousa não tiuera em seu coração. Sendo pollo contrário porque, todos estes miseraeis letrados de Iapão, o em que finalmente se fundão, & resolvem-se hé não auer Xaca nem Amida que possão saluar nem mais outra cousa por serem homens como elles que nascer & morrer, porém isto não o dizem claramente, para] trazerem o pouo emganado & com medo delle, (lhe darem falsas esperanças de saluacão.) Estranha hé a fé & ueneracão que esta gentildade tem a seus pagodes. Três ou quatro dias auerá que aqui ueo hum mancebo que antre todos seus parentes a elle somente trouxe o Senhor por sua misericórdia a conhecimento de sua santíssima fée. E contaue-nos as piadades com que sua mãe se compadecia delle, E se entresticia de o uer perdido, dizendolhe, "Filho pera que queres perder tua alma, E deixares de adorar a teu Deos Amida que todos teus antepassados adorarão, E delle tantas mercês receberão," com outras muitas palauras que facilmente poderão mouer a quem não tiuera tanta fée como elle.

Por certo, irmãos charíssimos, que não sem grande impulso & mouimento de Espirito santo ueio o padre mestre Francisco que nosso Senhor tem em sua gloria, buscar com tanta sede nas ultimas partes da descuberto esta nação tam remota, E alhea de seu Criador, porque em sua policia, tratamento & costumes (como o padre nosso mestre Francisco dizia) fazem em muitas cousas tanta auentajem aos Espanhões, — que hé uergonha dizelo. E se a gente que uem da China não tem ainda muito maior conceito do Iapão, hé porque não uêm nem conuersão mais que com mercadores E gente pouco polida que mora ao longo da costa, que comparada com a deste

reyno de Meaco hé mais infima que a da Beira em respeito da da[sic] Corte, E asy se chama cá no Meaco a gente do mato.

O que hé muito pera espantar E dar infinitas graças ao autor de todo bem hé uer quam marauilhosamente a diuina prouidência ordenou que começa-se sua santíssima ley ser admitida nesta cidade fonte das leis de Iapão com tam pouca indústria E fauor humano, E por instrumentos tam indignos de tal ministério, E especialmente receberem-na pessoas nobres, os quais por se mouerem puramente por sua saluação, E por conhecerem com rezões claras e euidentes que a não tem senão na ley de Deos, a tomão tam de proposito, E sai-lhes tam bem que sem duuida são confusão dos religiosos que cá andamos, especialmente a mym que os tenho pera estímulo de minha friozza, uendo a prontidão que têm em se darem a oração E folgarem de se confessar muitas uezes E praticarem das cousas de Deos, E em amarem a penitência sobre quantas nações temos uistas. (Por ser iá nesta comprido E temos poder-lhes causar fastio. E tãobem pollo irmão Lião <Luis> auer se departir pella manhã, E isto ser perto da mea noyte, me não dilato agora, mais somente lhes peço pello sangue de Jesu Christo nosso Senhor E Saluador E pollos infinitos merecimentos de sua sacratíssima paixão E morte que tenham particular memória de nos encomendar em seus sancto sacrificios E orações pella grande [184v] necessidade que de suas ajudas nesta terra temos, pedindo ao Senhor queira mouer os corações desta tão grande multidão da gente pera o conhecerem, seruirem E amarem, E que no fim desta breue iorneda nos faça a todos participantes de sua eterna gloria e beatífica uisão.) Desta Cidade de Meaco aos 27 do Abril de 1565.

Seruo inutil de todos, E seu indigno irmão Luis Froes.